

音声読み上げ 入試での「壁」

夢に向かって ④—上



文章を読むのがとても苦手で遅い。小学校高学年の漢字の読み書きもほとんどできない状況で、小5から通級指導教室に通う。

小学生のころは、宿題のプリントなどは、母が隣について問題文を読み上げ、答えだけをひらがなで書いて、耳から聞けばすぐに理解し、正解を言える。

そんな時、小学校の先生から紹介してもらったのが、茨城大の藤芳明生研究室が開発した、専用ペンで触れると文章を読み上げて

くれる「音声付教科書」だった。教科書以外の教材で



音声読み上げ用のペンを使って、国語のテスト問題を解く男子生徒。6月、奈良県、本人提供

も、あらかじめペンのマイクに向かって文章を読み上げて音声化し、録音用シールをはっておけば、ペンで触れると音声の流れ、速さ調整もできる。幼児や小学生にはとても便利だ。

このペンを使い始めてわかったことは、男子生徒には、高速の読み上げでも瞬時に聞き取り、内容を把握する力があることだった。

小学5、6年生の国語や社会のテストは、教員があらかじめ問題文をペンに録音し、音声化してくれた。

中1になってからも同様に、全教科の試験でこの方法を使った。「こちらの手間はもちろんかかりますが、生徒のためですから」と担任(28)はいう。

だが、高校入試でこの方

法が使えるのか――。

奈良県では、学習障害や自閉スペクトラム症などのある男子生徒が、2017年度の公立高校入試で、パソコン利用と機械による音声読み上げの配慮を認められた前例がある。その生徒は希望した工業高校に合格でき、私立大の高等専門学校を経て、来春から国立大に編入する予定だ。

ペンを使っている男子生徒も高校に進学し、将来は「ものづくりの分野へ進みたい」という夢がある。

ただ、現在使っているペンを入試で使うためには、入試前に誰かが問題文を音声化しておく必要がある。問題を事前に見ることは入試では難しい。一方で、高校入試で、個々の障害や特

性に合わせた合理的配慮を受けるには、中学時代の定期試験などでその方法を使って成果が出せた実績が重要になる。

合理的配慮や支援の方法について東京大学の「魔法のプロジェクト」で学び、今年度から男子生徒の通級指導をする中山めぐみ教諭(47)は、本人や保護者、周囲の教員らとも相談し、

「2学期の定期テストから人による読み上げに変えることにした」。機械による音声読み上げの指導も始めていくつもりだ。

音声読み上げの練習の先には、進学、そして夢の実現という未来がある。男子生徒はいう。「まずは、高校に合格したい」

(編集委員・宮坂麻子)